K140.72
2.12
2上

第二學年用上乙種

高等小學書キ方手本

文部省

しろたへの衣の塵は掃へども
憂きは心の墨なりけり。
とりぐにつくるかざしの花もあれど
にほふふのうるはしきかな。

高二九上

奥深き道も極めん物事の
本末をだにたがへざりせば。
國民をすくはん道も近きより
おし及さん遠きさかひに。

高二九上

寒地から熱地へ熱地から寒地へわたる
禽鳥で我が帝國の領土を過ぎて翼
を休めるものは少くない。鶴の群は西比利

高二七上

亜方面から飛んで来て朗な聲を朝
鮮の空に響かし蹈は熱帯地方から
飛んで来て一望十里の青田に下り立つ。

高二七上

彫刻繪畫類聚參

考陳列裝飾展覽

近衛。摩耳。九條。豆

利。織田。豐臣。德川。

人怒ル時ハ感情益〻激スルヲ以テ言行自ラ常軌ヲ逸シ冷静ノ我ニ復リテ後悔スルコト多シ。西諺ニモ怒ノ最後ノ瞬間ハ後悔ノ最

初ノ瞬間ナリトイヘリ。怒ルトモ直チニ之ヲ言動ニ發スルコトナク先ヅ心ヲ冷静ニシテ然ル後徐ニ之ニ對スル處置ヲ考フベキナリ。

豈余を妨ぐるアルプ山あらんや。

高二乙上

十一

不能といふ語は唯愚人の辭書に在り。

高二乙上

十二

鏡は一物をたくはへず私のんなくして萬象を

高二乙上

照すに是非善悪の姿あらはれずといふことなし。

高二乙上

官國幣社。熱田。賀茂。男山。平野。稻荷。廣瀨。龍田。

鹿島。香取。湊川。藤島。四條畷。鹽竈。金刀比羅。

四方に鳴きてけくらんほとゝぎす
渡のわたりのまだ和泉きに。

高乙上
高二乙上

时鳥平安城をすぢかひに。
時雨鳴くや雲雀と十文字。

千古の雪を戴ける富士の高嶺も一抹の白雲其の山腰を掠むる時益〻雄大の観あり。霞の奥にも

高二乙上

尚花あるを思はしむる時吉野山一目千本の光景は殊にゆかしきを覚ゆるにあらずや。

高二乙上

顯激皎。細菌繁殖。

腐敗物。新陳代謝。

兄弟泣く〳〵立出づるを母は
聲を上げてあれ止め給へ人〳〵
よ今こそ時敎が勘當許す

ぞと泣く〳〵立出づれば兄
弟もうれし泣きに伏縛び
見る人〳〵もたもとをしぼる。

矯風。彰善。慰撫。救濟。

去華就實。拳々服膺。

斯心奮發誓神明。

古人有云斃後已。

拝啓出発の際は清多用中わざ〳〵寛送り
下され厚く御禮申上ゲ昨夕八時半無事京
城着今朝拓殖會社に出頭石橋理事に面
會致し委細懇切に清世話下され庶務課

に勤務すべき旨申渡され当分事務見
習の上實地農業に従事致すことに相成
るべくとの事に付度し取敢へず御禮旁右
御報申上度委細は後便に譲り申し敬具

咸鏡。平安。黃海。京畿。

江原。忠清。全羅。慶尚。

損失價格契約掛

金仕拂保證料厄

佛法得道說教感

化譬喻智慧慈悲

思慮周密にして果断に富み計
畫一たび定まれば直ちに之に着手し
勇往邁進成功を見ざれば止まず。

活動を以て無上の娯樂とし安逸を
以て最大の苦痛とす。獨り自ら活動
するのみならず又能く人を活動せしむ。

H 180172-212
-25

明治四十四年十二月十日翻刻印刷
明治四十四年十二月二十日翻刻發行

著作權所有

高等小學書キ方手本
第二學年用上乙種

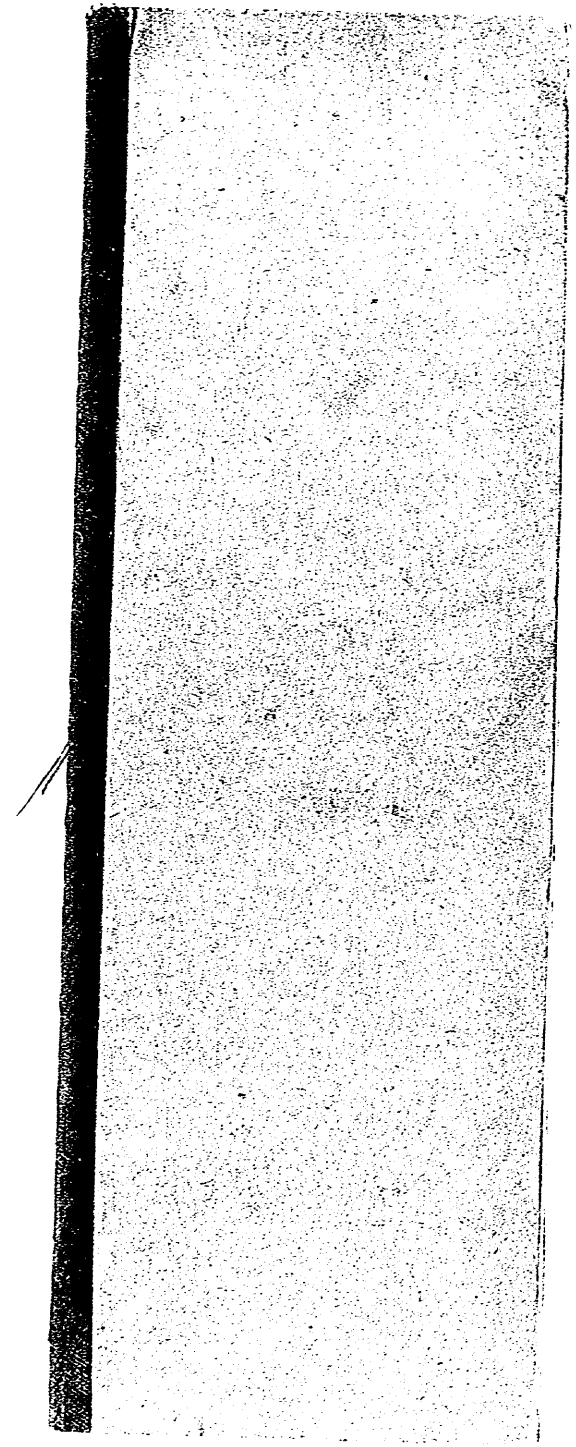
定價金三錢

著作兼發行者　文部省

書者　香川熊藏

東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
雕刻發行兼印刷者　東京書籍株式會社
代表者　原亮一郎

印刷所　東京市小石川區指ヶ谷町百三十六番地
東京書籍株式會社工場

明治四十四年十二月十五日
文部省檢査濟

發賣所　東京市日本橋區新右衛門町十六番地
株式會社國定教科書共同販賣所